

平均的老人の生活実態

池 川 清

1 は じ め に

老人生活調査は政府においても、数量がはかり知れない程多くのものがなされ出版されている。また、地方自治体、社会福祉協議会においても多くのものがある。それはいずれも、ある行政的目的をもって、低所得老人、ねたきり老人などの対策をたてるための資料を必要とすることから発想されたものでそれぞれ有意義な試みとして高く評価してよい。

私が、ここに試みた「平均的老人の生活実態」は、今までになされなかった種類のものである。それは以下の点を考慮している。

(1) 行政機関、社会福祉協議会の老人調査は、その目標を主として福祉に欠ける状態にあてていること。

(2) しかし、老人を今日の問題として取り上げなければならないのは、底辺の一割の老人ではなく、国民のなかに八割を占める平均的老人の姿でなければならない。のこる一割の老人は有産老人として社会から遊離した上層階級に属する老人達である。その人々の生活実態は誰も調査することができないであろう。なぜなら、それらの老人は被調査者となることを拒否するであろう。それらの上層階級に属する老人の生活実態はロータリークラブやライオンズクラブまたは、財界人が多く所属している社交クラブの会員の協力を得られるならば実施できるであろうが、わがくにでは老人という言葉が誤解されているために、むしろ、会員の生活実態調査などということではアプローチしなければならないであろう。それは学者や行政機関では実施不可能である。

2 平 均 的 老 人

老人ほど非均一化された人間はない。人間は高令化するにしたがってその生

活のしかたが個人化される。起床の時間、同居生活している人との続柄、食事の好み、余暇利用の方法、肉体的変化、精神的変化などをとりあげても、乳幼児や青少年時代の均一的な日常生活とは脱却して個性が強く表現される。

街頭でみる老人達の外見的容姿は白髪、緩慢であってもそれぞれ生活内容には格差が大きい。

一般に老人調査がなされる場合には、福祉の対象としての老人がとりあげられてきたから、それらの調査結果には、平均的老人のイメージが薄いことは否定できない。

ここに云ふ「平均的老人」とは、心斎橋でみたり、温泉保養地に憩いを求めている中間的な日本の老人大衆である。

この老人層は民生委員とも縁遠く、また老人クラブの会員であるとは限らず、いはば今までの老人調査の対象外であった老人達である。この老人に接近することは公的機関では困難な対象である。そのために、私は機縁的方法を採用した。私が関係している女子大学の学生の隣りに住んでいる老人とか、とにかく女子大学生が接近し、生活の内容を質問しても、それに好意をもって回答してくれる老人達を選ぶことにした。

一般には金銭に関する調査事項があると老人に限らず日本人は応答反応を示さないから調査が挫折する。また拒否しがちであることは過去の経験から明かである。しかし、顔見知りの隣りの女子大生がたづねにきたときや、親類の女子大生が質問しているときは、そこに継続する人間的近づきによって案外卒直な回答が得られるのではあるまいか。私は、この調査を完全なものとは思わないが、過去に試みられなかった中間的な平均的老人の生活を知る上においてわがくにで初めての試みであると考えている。

調査に参加した女子大学は神戸女学院大、その他の女子大学であるが、このほか、老人学級（神戸市主催）に出席した老人（男33名、女33名）も平均的老人として最も典型的な人々である。

(1) 調査のしかた

期間は昭和47年1月——11月の間にできるだけ個人面接のできる老人を女子学生に選ばせて調査表にもとづいて面接調査をした。一部の神戸市の老人は老

人学級に出席している機会に調査表を配布して記入してもらった。

(2) 老人の居住地域は主として大阪、阪神、神戸であるが、なかにはそれ以外の地域で学生が夏期に帰省するときに選択したものも若干ふくまれている。

(3) 年齢について。

60才以上の高年者を一応老人として選んだ。しかし調査者（女子大生）の一部のものは60才すぎの男は老人調査という言葉には抵抗を示している。むしろ65才以上とすべきではないかと云ふものもいるが、ここでは60才代と80代とは同じく老人といっても、その生活状態はどれ程ちがっているかをみつけ出すことを目的としているから、60才以上を対象者とした。

70才代は中間値の老人として考えてよい。

ここに選ばれた老人は女子大学生がその周辺の老人として接近し得る老人を無作為に自由に選定し、面接記入をしてもらったから比較的信頼性のある回答を得ていると考えられる。

80才代の老人を、もっと多数選ぶことが出来れば比較するのに適当な資料をうることができたであろう。しかし一般の老人クラブなどでは60～70代が主であるのにくらべて、調査は70～80代が主であることが特色といえる。

3 調査の概要

(I) 対象老人数

表 I

調査対象者 (老人)	年令別 性	60代	70代	80代	計
	男	53(43%)	72(44%)	25(43%)	150(43%)
	女	69(57%)	93(56%)	33(57%)	195(57%)
	合計	122(100%)	165(100%)	58(100%)	345(100%)

上記の表 I の通り総計 345 名で、ほぼどの年令集団においても男が 43 %、女が 57 %である。

(2) 過去の職業経歴 (表 II)

大都市の大阪、神戸の男老人が多いだけに、その職業経験は商売が多いのは

当然である。ついでサラリーマン、工場関係である。工員がすくないのは女子学生が接近し得る男老人に工員経験者がすくないためである。それにくらべ公務員（教員）が多いのは知識階級に属する老人と近い関係にある女子学生であることを示している。農業があげられているのは、都市老人以外に農村老人が含まれていることを示している。これは日本の平均的老人の姿を追求する場合の重要な要因であるといえる。

つぎに女老人の大半は家事に従事していた主婦である。ついで、商農があげられるが公務員（教員）が13名いることは男老人の場合と同様に女子学生の接近しやすい周辺の女老人の実相を示すと共に老人学級へくる女老人には女教員の経験者が常に出席しているといえる。

表Ⅱ 若い頃の職業

性 別		男				女			
年 令 別		60代 (53名)	70代 (72名)	80代 (25名)	計 (150名)	60代 (69名)	70代 (93名)	80代 (33名)	計 (195名)
若い時の職業									
分 類	商売	14	19	6	39	8	20	7	35
	工場関係	3	26 (含重複)	1	30	1	1	—	2
	会社員	14	15	5	34	1	2	—	3
	農業	8	13	7 (含重複)	28	9	14	9	32
	工員	2	2	—	4	—	1	—	1
	公務員（教員を含む）	6	10	3	19	5	6	2	13
	家事	—	—	—		44	53	15	112
	内職	—	—	—		2	4	1	7
	その他	8	8（建設業など）	5	21	5	2	1	8

老人の就業は対策が云われる割りは老人は雇ってくれるところがすくない。

老人を働かせるのは近所のていさいが悪いとして同居の息子が好まない。そのため同居している老人は隠居を押しつけられる傾向さえある。

(3) 現在の職業（表Ⅲ）

男の60才代は88%が働いている。70代では44%と減少し80才代では働くのは

無理であることが明かである。老人の就労あっせんは70代になると特に困難であるから紹介事業も、この70才において努力をすべきである。

女の60代は労働市場においては、すでに追い出されてしまう年令であるが、仕事をしたいものが15%いる。

もう働けないと意識している女老人は男と比較して早く老いこんでいることを示している。

老人の職業あっせんは、男は70代、女は60代を中心に求人開拓の要がある。あるいは老人疵護工場が必要となるであろう。

表Ⅲ

		男			
現 在 の 仕 事		60代(53名)	70代(72名)	80代(25名)	計 (150名)
区 分	今も働いている	36(88%)	24(44%)	4(17%)	64(54%)
	まだ働けるが仕事がない	3(7%)	11(20%)	1(1%)	15(13%)
	もう働けない	1(2.5%)	6(11%)	12(52%)	19(16%)
	働きたくない	1(2.5%)	13(24%)	7(30%)	20(17%)
	不 明				
		女			
現 在 の 仕 事		60代(69名)	70代(93名)	80代(33名)	計(195名)
区 分	今も働いている	20(38%)	29(37%)	4(13%)	53(33%)
	まだ働けるが仕事がない	8(15%)	7(9%)	—	15(9%)
	もう働けない	10(19%)	24(31%)	22(71%)	56(35%)
	働きたくない	9(17%)	18(23%)	5(16%)	32(20%)
	不 明	6(11%)			6(3%)

ここで注意を要することは、これらの老人が、「今も働いている」と答えているのは賃金収入を得て働いている就労のみではない。ある老人は息子の商店を手伝うことも働いていることを意味し、また女老人においては家事、家政の処理をしていることを働いていると解している場合もある。

「まだ働けるが仕事がない」、「働きたくない」と答えた老人は収入を目的

とする就労意志を表明したものと解してよいであろう。

老人の現在の就労を調査することは、今回の如き学生による調査では不完全で、長期にわたり詳細な質問をくりかえして試みなければ、老人の職業の把握は容易でない。たとえば、パートで週一回働きに行く老人も、「今も働いている」と答えるであろうし、毎日働きに出かける老人もいる。また、下宿業、アパート管理、店番、農業、不動産管理、司法書士など年令に関係なく、時間的に自由がある職業に就いている老人もみられる。80才の女老人で、今も働いていると答えたものの職業をみると無給の団体役員として週三回事務所へ出かけている人もいる。

別居している老人は小づかいをもらう機会がすくないから、働ける老人は働いて小づかいを稼いでいるものが多い。また働けるから別居しているとも云える。

(4) 配偶関係 (表Ⅳ)

配偶者は年令の進むと共に男女とも死別している。ここで注意しなければならないことは、男老人の有配偶者の妻がすべて最初の妻であるか、あるいは再婚の妻であるかが明らかなでない。

女の60代で58%が無配偶者であることは、結婚あっせんの必要性を感じさせる。

表Ⅳ

		男			
		60代(53名)	70代(72名)	80代(25名)	計 (150名)
配偶者	あり (初婚・再婚不明)	47(89%)	52(72%)	12(48%)	111(74%)
	なし(死別・離別を含む)	6 (11%)	20(28%)	13(52%)	39(26%)
		女			
		60代(69名)	70代(93名)	80代(33名)	計 (195名)
配偶者	あり (初婚・再婚不明)	29(42%)	24(26%)	6 (18%)	59(30%)
	なし(死別・離別を含む)	40(58%)	69(74%)	27(82%)	135(70%)

男老人は80代、女老人は60代で半数が配偶者がいない。この場合、男老人が

妻をもっていることは、60代、70代において配偶者と死別しても再婚をしている場合もあろう。しかし女老人にあってはその可能性があるにもかかわらず日本の旧来の習慣から再婚している女老人がすくない。これは不自然な姿といえる。

(5) 同居者

70代の男が夫婦2人きりであるものが25%、しかるに80代において28%あり。この点は、より明かにされなければ、理由は不明である。あるいは80代の男老人の再婚の妻が多いか、またわ特別の事由があるのかもしれない。

60代では男女ためとも未婚の息子・娘をかかえているに結婚している息子夫婦と同居しているものはすくない。70代になると、その比率は43%以上に増加している。

表V 同居者

		男			
		60代(53名)	70代(72名)	80代(25名)	計(150名)
同居者	なし（ひとり暮らし）	—	（ 4%）	（16%）	（ 5%）
	配偶者と二人きり	（47%）	（25%）	（28%）	（33%）
	未婚の息子・娘と	（19%）	（ 8%）	—	（11%）
	息子夫婦と	（28%）	（43%）	（44%）	（38%）
	娘夫婦と	（ 4%）	（10%）	（12%）	（ 8%）
	その他（兄弟姉妹と）	（ 2%）	（ 3%）		（ 5%）
		女			
		60代(69名)	70代(93名)	80代(33名)	計(195名)
同居者	なし（ひとり暮らし）	（10%）	（15%）	（18%）	（14%）
	配偶者と二人きり	（15%）	（ 5%）	（ 6%）	（ 9%）
	未婚の息子・娘と	（17%）	（ 8%）	（18%）	（13%）
	息子夫婦と	（35%）	（53%）	（55%）	（40%）
	娘夫婦と	（16%）	（ 9%）	（12%）	（15%）
	その他（兄弟姉妹と）	（ 7%）	（10%）	（ 1%）	（ 9%）

女は60代において、すでに配偶者を失ふものが多いために娘・息子または結婚した娘夫婦と同居の傾向を示している。女は80代になっても未婚の娘と同居中の老人が多いことは互に世話し合える親子の関係の密接さを示している。中年の未婚の娘（息子）が80代の老親を世話しているという事実は、この未婚の娘・息子が戦争によって結婚を失った娘や離婚している息子を意味している。これらの娘・息子はいずれも45才以上である。

結婚している子と同居する三代世代は最も普通の家族構成として、日本の長男相続の遺物であったが、最近では、とりわけ戦後の社会情勢から必ずしも男子と同居するとは限らない。

結婚した子と同居するものについて詳細に分析してみると次の表Ⅶの通りである。

表Ⅶ

		男				女			
		60代	70代	80代	計	60代	70代	80代	計
子と同居するもの		17名	38名	14名	69名	35名	57名	22名	120名
内	息子夫婦	88%	82%	79%	83%	69%	86%	82%	76%
	娘夫婦	12%	18%	21%	17%	31%	14%	18%	24%
孫が同居中のもの		4名	25名	11名	40名	18名	32名	13名	63名
		24%	66%	79%	58%	51%	56%	59%	53%

推察するに、女老人は娘夫婦と同居すれば嫁・姑の問題がなく日常生活が円滑であるからであろう。

男老人が娘夫婦と同居するのは、娘夫婦の家計を軽減するために同居しているとも考えられる。経済的に有産な男老人は娘夫婦と同居して家計を補助し、60代の女老人は孫の世話の手伝いをさせられるというのが一般的理解である。

(6) 文化生活

平均的的老人においてテレビ、新聞、電話はどの程度に利用されているか。一般にはテレビは一軒に二台といわれているが。この調査では老人の4～6%がテレビを所有していないことが明かになった。

		男	女
テレビ	あるもの	94%	96%
	ないもの	6%	4%

しかしながら、この調査と同時期（47，6）になされた八尾市の老人調査においては、テレビのない老人は2.8%であった。都会地におけるテレビの普及度からみれば、テレビのない世帯は3%ぐらいであろうと推定してまちがいがなからう。

新聞の購読についても次の如き結果が示される。

	男				女			
	60代	70代	80代	計	60代	70代	80代	計
購読しているもの	98%	94%	87%	94%	96%	94%	84%	93%
していない	2%	6%	13%	6%	4%	6%	16%	7%

月極めで新聞を購読していない老人は80代においては男女とも13～16%を示している。80代になると新聞の内容、活字が老人と関係するのかもしれない。これは過去における老人の文化調査においても、私は老人もすべて新聞を購読しているものと仮定して、「新聞をよくよむか」と質問してみると、無回答が次の如く示されたことがある。

	男				女			
	60代	70代	80代	計	60代	70代	80代	計
新聞をよくよむかの 問に対して								
無回答のもの	2.5%	4.8%	8.3%	3.8%	7.7%	7.8%	16.0%	9.3%

（昭47.2 大阪市住吉区老人調査）

上記の住吉区の調査結果においても80代の女老人は16%が無回答であることから、私の調査で偶然に80代の女老人が16%購読していないと答えているから、新しい研究課題といえる。

80代の男女老人の13%～16%は、ひとり暮らしの男女老人（16～18%）とほぼ近い数字であることも参考にしてよい。すなわち、80代の独居老人は一人だ

けで新聞を購読することを「もったいない」と考えているのかもしれない。

電話 文明が進歩する程、電話は普及するのは当然であるが、わが国では先進国ほどには電話が普及していない。設備費が高額なこと、電話料が高いことなどもその理由であるが、一般には贅沢だと考えられている。

老人について電話の有無を調べてみると次の表の通り、所持している男老人が87%，女老人が85%である。とりわけ高年になる程電話が有用であるにかかわらず電話を所持していない。足の不自由，社交の機会の減少などから高令者は外部と電話を利用して接触を保つことが可能であるから，公費で電話を架設する政策などがとりあげられるわけである。現に，ねたきり老人の宅には福祉の經理で電話が貸与されている地区もある。これは将来もっと普及すべきである。

		男				女			
		60代	70代	80代	計	60代	70代	80代	計
電話	あるもの	95%	85%	78%	8%	83%	80%	71%	85%
	ないもの	5%	15%	22%	13%	17%	20%	29%	15%

特に男女の比率において明かになる如く，女老人は文化的に不便・不自由な生活をしている。

以上のべた如く，平均的老人の文化生活は，私達が想像している如く，極めて劣悪な状態にあるといえる。老人福祉は年金とか扶助費などの金銭的充実が第一義的に先行すべきであるが，それについて，老人に豊かさのある生活，近代文化との近づきが課題としてとりあげられなければならない。

ひとり暮らしの老人にテレホンサービスが普及するにつれて電話は老人生活の必需品と考えてよい。

(7) 小づかい (表Ⅶ)

老人の小づかいの収入源は，(イ) 自分で働いて稼いだ金，(ロ) 子からもらっている金，(ハ) 株とか財産収入，(ニ) 年金などの公的な金である。

男で小づかいをもらっているものは70代から急増している。これは職業からの離脱による生活力の低下と息子，娘の親に対する理解並びに経済力の充実を

示している。この調査において男女とも高令になるにつれて小づかいをもらっている。

表Ⅶ 小づかい

		男			
		60代(53%)	70代(72名)	80代(25名)	計 150名
小づかい	もらっている	25名(47%)	49名(68%)	18名(72%)	92名(61%)
	同居の息子から	11件 ①	20件 ①	10件 ①	41件 ①
	息子の嫁から	2件	4件	2件	8件
	娘から	2件	5件	2件	9件
	別居の息子から	7件 ②	11件 ②	2件	20件 ②
	息子の嫁から	1件	6件	3件 ③	10件
	娘から	4件 ③	10件 ③	4件 ②	18件 ③
	兄弟姉妹から	2件	1件	—	3件
	その他から	3件	2件	—	5件
	もらっていない	28名(53%)	23名(32%)	7名(28%)	38名(39%)
		女			
		60代(69名)	70代(93名)	80代(33名)	計 (195名)
小づかい	もらっている	52名(75%)	73名(78%)	27名(82%)	152名(78%)
	同居の息子から	22件 ①	27件 ①	10件 ①	59件 ①
	息子の嫁から	12件 ②	16件 ②	5件 ③	33件 ②
	娘から	8件	14件	—	22件
	別居の息子から	10件 ③	15件 ③	7件 ②	32件 ③
	息子の嫁から	6件	8件	2件	10件
	娘から	10件 ③	15件 ③	7件 ②	32件 ③
	兄弟姉妹から	—	2件	2件	4件
	その他から	3件	3件	2件	8件
	もらっていない	17名(25%)	20名(22%)	6名(18%)	43名(22%)

①②は件数の多い順位を示す

女老人は同居中の息子、息子の嫁からもらっている。嫁と姑の関係においても自然の親子関係に近づけようとするすがたがみられる。ついで別居の息子娘が多いことにくらべて、別居の息子の嫁と姑の関係は薄いことを示している。就職の条件からみても女老人は60才代ではすでに就業困難であるから小づかいを子からもらうことは当然の必要性からもうかがえる。

小づかいをもらっていない老人が小づかいに不自由しているとは限らない。財産、恩給のあるものがある。

男女老人とも実の息子と同居しているものが多いから、その息子から小づかいを直接手渡していることは自然のなりゆきといえる。しかるに娘夫婦と同居している場合には、その娘は老親に小づかいをあげている件数が多くない。これは、あとに述べる80代の女老人は小づかいを必要とする度合が顕著にみられないために、娘と同居する80代の女老人が4人いるにもかかわらず、娘は小づかいを渡していない。おそらく、必需品は娘がすべて買い与えているのであろう。また、一緒に出かけて娘が支払っているから老親(女)は直接小づかいを貰い、また金を支払う必要がないものと解される。

老親が80代といえ、その実の娘達はすでに50才前後であるから、一家の家計の実権を握っている年令の主婦である。親と別居していても、その娘(50代)の家計のすべては、その主婦に握られているので、80代の男女とも小づかいをもらうのは息子について50代の娘からとなっている。

主人のいる女老人は息子や娘から小づかいをもらうのはすくなく、むしろ主人からもらっている。

(8) 小づかいをいつもらうか

小づかいをくれる人の経済事情によって、いつもらえるかがきまるのであるがどんな時機にもらっているかを平均的に解明しておくことは意味がある。

男女とも、小づかいは毎月きまってもらっていることは次の二つの表Ⅳによって明かにされる。

9月15日の敬老の日は社会的行事としては年々盛大になっていくが、家庭では70以上の男老人において、「敬老の日」の意義が認められはじめる。すなわち家庭で男が老人(としよりの感じ)として受けとめられるのは70からである

表Ⅸ 小づかいをもらう機会

男老人の小づかいをもらう機会を件数の順に示す

	男			
	60代(53名)	70代(72名)	80代(25名)	計(150名)
毎月きまってもらっている	31件 ①	26件 ①	12件 ①	69件
息子(娘)のボーナスのとき	6 ②	10	2	18件
正月	5 ③	9	3	17件
旅行に出かけるとき	3	11 ③	3	17件
敬老の日	2	12 ②	2	16件
盆	3	6	3	12件
息子がきたとき	5 ③	5	2	12件
娘がきたとき	3	6	2	11件
息子・娘の家へ行ったとき	1	6	2	9件
老人の誕生日	3	4	1	8件
父の日	1	6	1	6件
嫁がきたとき	2	1	2	5件
手伝いをしたとき	—	—	—	—
その他 (娘の夫がきたときを含む)	1	4	4	9件

といってよい。この調査に示されていないが、敬老の日には金銭でなしにお祝の品などをもらっているものもある。

70代になると男老人が旅行に出かけるときに小づかいをもらうが、60代では子らは老人が自分の金で旅行に出かけうると解しているため小づかいをあげていない。

この調査による限りでは、わが国では親の誕生日には無関心で盆の方が習慣として小づかいに定着している。誕生日はその子を生んだ親が、子に対していただいている記念の日らしい。

女老人においても正月は依然としてお年玉の月であることを示している。

父の日、母の日と老人との関連をみるに、男老人には「敬老の日」は「父の日」よりも普及しているし衆知されている。女老人には「敬老の日」，「母の

表Ⅱ—1 女老人の小づかいをもらう機会を件数の順に示す

	女			
	60代(69名)	70代(93名)	80代(33名)	計(195名)
毎月きまってもらっている	27件 ①	45件 ①	15件 ①	87件
正月	9 ③	16 ②	12 ②	37件
旅行に出かけるとき	14 ②	14 ④	5	33件
息子(娘)のボーナスのとき	14 ②	15 ③	3	32件
盆	7	12	9 ⑧	28件
娘がきたとき	5	16 ②	7 ④	28件
敬老の日	8	11	5	24件
息子・娘の家へ行ったとき	2	16 ②	5	23件
母の日	6	13	3	22件
息子がきたとき	6	8	3	17件
老人の誕生日	5	4	1	10件
嫁がきたとき	5	4	—	9件
手伝いをしたとき	1	—	2	3件
その他	4	3	2	9件

日」は同じ程度に家庭行事となっていることがうかがえる。

旅行は男では70代、女では60代、70代とも小づかいをもらう機会として高い率を示している。女老人にとって正月は幸せな月である。しかし男老人には息子のボーナスの月が楽しみである。さきの小づかいを誰にもらうかでは別居中の息子の嫁からは男に10件、女に16件あがっているが、これは郵送なども含めたものと考えられる。

神戸市主催の婦人学級の聴講者84名について、その年齢構成をみるに次の通りである。

(昭47・10)

年 令	30—34	35—39	40—44	45—49	50—54	55—59	60—64	65—69	計
人 員	1	6	22	16	11	16	6	6	84
主人の父	同 居	1	1	1	2				5
	別 居		2	4	3				9

	死 亡		3	17	11	11	16	6	6	70
主人の母	同 居	1	2	6	4					13
	別 居		2	6	1	1	3			13
	死 亡		2	10	11	10	13	6	6	58
妻 の 父	同 居		1	1	1					3
	別 居		3	8	3	1				15
	死 亡	1	2	13	12	10	16	6	6	66
妻 の 母	同 居		1	1	1					3
	別 居	1	3	9	7	4	2			26
	死 亡		2	12	8	7	14	6	6	65
老人と同居	主人の親	1	2	6	4					13
	妻の親		1	1	2					4

これらの婦人達が老親にどんな機会に小づかいをあげているかを質問した結果、次の回答があった。

	35—39	40—44	45—49	50—56才	計
婦 人 の 実 数	6	22	16	11	55
(主人側の父母に)					
正 月	3	6	6	5	20
老人が旅行にいくとき	3	5	4		12
盆		3	5	4	12
敬老の日	1	3	2	1	7
老親の誕生日			2		2
(妻側の父母に)					
正 月	2	8	6	4	20
盆	1	6	6	3	16

敬老の日	1	5	2	1	10
老人が旅行に行くとき	3		3		6
老親の誕生日	1	1	1	1	4

老人のすべてが豊かな財産をもっているわけではないが、上記の婦人学級の聴講者に対して、老人が財産・収入があるから小づかいをあげる必要がないと答えたもの、及び、老親から小づかいをもらっていると答えたものを示すと次の通りである。

	35—39才	40—44才	45—49才	50—59才	
婦 人 の 実 数	6	22	16	11	55
主人の親に財産があるから小づかいをあげる必要なし	1	5	2	1	9
妻の親にも、同上		2	1		3
老親から補助してもらっていないもの	6	15	9	5	35
(不明のもの)		(5)	(7)	(6)	(18)

婦人学級の婦人の回答と、老人に質問したときの回答とは、対象者が異なるから、関連して解明することはできない。

息子がくれる小づかいは金額が大きが回数はすくない。

嫁や娘のくれる小づかいは金額は小さいが回数が多い。

老人が小づかいをもうか、どうかは、その老人の心理的影響が大きいと云わなければならない。小づかいは単に金銭ではなく、もらう人の心理的満足を与えるものであるから、老人は愛されている、受容のよろこびをもつことになる。

(9) 小づかいのつかいみち

小でかいのつかいみちの数値は表Xの示すとおりで、男女共通して高い件数を示しているのは孫のための消費、旅行の費用である。人気のないのは映画である。クスリは男女とも高い比率であるが、とりわけ男は70以上、女はすでに60才になるとクスリのため小づかいの消費はベスト5にはいっている。

小づかいは男女によって、その使いみちが異なっている。

男ではタバコ、散髪、社交上の団体の会費、酒が最上位に位置している。し

かしながら年令階層によって次の通り大きなひらきがみられる。

表X 小づかいのつかいみち

年 令 階 層 別	男				女			
	60 (53名)	70 (72名)	80 (25名)	計 (150名)	60 (69名)	70 (93名)	80 (33名)	計 (195名)
小づかいのつかいみち	件数	件数	件数	件数	件数	件数	件数	件数
1 衣 類	7 ⑨	11	7 ④	25 ⑫	23 ③	19 ⑨	6 ⑥	48 ⑧
2 下 着	7 ⑨	8	6	21 ⑮	20 ⑥	21 ⑧	5 ⑦	46 ⑨
3 タバコ	30 ①	41 ①	8 ③	79 ①	3	12	3	18
4 酒	16 ⑤	18 ⑥	7	41 ⑥	3	2	1	6
5 おやつ	6	14 ⑨	11 ②	31 ⑧	15 ⑨	27 ⑤	17 ②	59 ⑤
6 本	12 ⑥	12	2	26 ⑪	8	4	1	13
7 孫への小づかい	18	25	5	48	26	44	18	88 ①
8 孫へのみやげ	11	29 ②	9	34 ②	22	70 ②	15	112 ①
9 趣味の会費	6	8	3	17	15 ⑨	13	3	31 ⑫
10 団体会費	9 ⑦	25 ④	8 ③	42 ⑤	19 ⑦	21 ⑧	3	43 ⑩
11 旅行の費用	18 ④	25 ④	6	49 ④	27 ②	26 ⑥	4	57 ⑥
12 芝 居	5	9	—	14	10	10	4	24
13 漫才・落語	5	3	—	8	4	7	2	13
14 映 画	3	2	—	5	—	2	—	2
15 お寺まいり (交通費さい銭)	7 ⑨	15 ⑧	7 ④	29 ⑩	22 ④	47 ②	15 ③	84 ③
16 化粧品	3	—	—	3	9	6	3	18
17 くすり	8 ⑨	22 ⑤	11 ②	41 ⑥	23 ③	30 ④	10 ⑤	63 ④
18 あんま・やいと	8 ⑧	5	3	16	5	15	3	23
19 ハガキ・切手	8 ⑧	17 ⑦	7 ④	32 ⑦	12 ⑩	13	3	16
20 文 具 費	7 ⑨	8	2	17	6	6	2	14
21 趣味の材料	8 ⑧	12	3	23 ⑬	7	13	—	20
22 エサ代	4	4	2	10	3	5	2	10
23 散髪理容	21 ③	30 ③	12 ①	63 ③	15 ⑨	18 ⑩	5 ⑦	38 ⑪
24 パチンコ	5	7	—	12	—	—	—	—
25 はきもの	5	5	4	14	21 ⑤	18 ⑩	4	43 ⑩
26 会食(友人と)	9 ⑦	12	1	22 ⑭	10	12	1	23
27 おそなえ	6	13 ⑩	7 ④	30 ⑨	23 ③	43 ③	20 ①	86 ②
28 貯 金	9 ⑦	11	8 ③	30 ⑨	16 ⑧	25 ⑦	11 ④	52 ⑦
29 そ の 他	2	7	5	14	2	6	2	10

	男		
順位	60 代	70 代	80 代
①	タバコ	タバコ	散 髪
②	孫のための消費	孫のため消費	くすり、おやつ
③	散 髪	散 髪	タバコ、団体の会費、貯金
④	旅行の費用	旅行、団体の会費 (社交上)	孫のための消費、お寺参、ハガキ切手、お供え
⑤	酒	くすり	
⑥	本	酒	
⑦	貯金・団体の会費・友人との会食	ハガキ、切手	
⑧	くすり、あんま、ハガキ、趣味の材料	お寺参り	
⑨	衣類、下着、お寺参り、文具	お や つ	
⑩	おやつ、お供え、趣味の会費	お 供 え	

これによって老人政策を考えるならば、老人用の安いタバコの販売の必要なこと、また値上りする散髪代（月一回が多い）の割引は風呂の割引以上に重要である。旅行、酒は60～70代では上位にあるが、80代では、おやつとくすりが特にめだってくる。また旅行にかわって貯金が上位になっている。体力の衰えと共に生活不安を自覚することを物語っている。

高令になれば頼りにするのは金ばかりということになるので、貯金するようになる。金をもっている老人は家族もよく面倒をみてくれると考えるために男女とも80代では貯金の占める順位は最上位になっている。

つぎに女老人の小づかいの使途順位についてみるに次の通りである。

女老人は60代には旅行、衣類、下着、はきものなどは女らしさを示す率である。これは70、80にもみられるが60代ほどではない。くすりは老人には大きな負担となっている。ついで60、70では旅行を楽しみにしているが、80代では減少する。しかし、祖先崇拜の思想の厚い明治生れの女老人は祖先、亡夫のためのお寺参りとお供えが極めて多い。また、ある場合にはレクリエーションになっている。生活の不安がつきまとう80代の女老人は男にも共通しているが貯金を重要視している。

	女		
順位	60 代	70 代	80 代
①	孫のための消費	孫のための消費	孫のための消費、お供え
②	旅行の費用	お寺参り	お や つ
③	衣類、くすり、お供え	お 供 え	お寺参り
④	お寺参り	く す り	貯 金
⑤	はきもの	お や つ	く す り
⑥	下 着	旅行の費用	衣 類
⑦	団体の会費	貯 金	下着、理容
⑧	貯 金	下着、団体の会費	旅行の費用、芝居、はきもの
⑨	趣味の会費、理容、おやつ	衣 類	
⑩	ハガキ、切手	理容、はきもの	

また、女としてのたしなみの理容は男の散髪と同じく考えなければならない。しかし男の散髪が月一回であるのに女の理容（セット）は3月に一回で回数はすくない。男のタバコ、酒にかわるものとして、高令になるほどおやつの占める位置が高い。70以上の女老人にはおやつを、60代の女老人には身につけるものを、おみやげにあげることが喜ばれるであろう。

一般に云えることは都会の老人は生活範囲が大きいから、小づかいの使途も多方面にわたっているが、農村の老人は小づかいの使途が狭い。

青年の小づかいと比較してみると、学生は遊ぶ小づかい錢をかせぐためアルバイトをする。青年の小づかいは遊ぶための金が多いが、老人は遊ぶ金ではない。

一般に青年の小づかいは自分の楽しみに使っている。老人は孫に小づかいをやって楽しんでいる。老人に対してはもっと小づかいの使い方を教育する必要がある。

老人は自分のほしいものを買うよりも、孫のよろこぶ顔を見るのが楽しみである。しかし、赤坊や6ヶ月ぐらいの乳児は喜ぶわけがないので、老人は孫に物を買って与えることによって間接に息子、嫁、娘との心理的交流をはかっている。

と解される。

物を買うこと、何を買うおうかと考えるのは人間にとって楽しみの一つである。老人にとっても、買い物をするために商店へ行く、心斎橋へ行くのは生きている証拠としての楽しみである。

小づかいがないことは、あじけない生活になる。

経済的に豊かな老人は小づかいを自分の趣味、娯楽のためにつかうが、恵まれない老人は小づかいの額が僅少であり、年金など小づかいに等しい金でも生活費に消えてしまう。

小づかいの少ない老人の楽しみはそれだけ量的にも質的にも減少する。

(10) 文通 (表Ⅺ) (表Ⅻ)

文通については対象の全老人について調査することができなかったが男女計 280 名について調査した結果をもとに考察をしておく。

文通は社交を示すものと考えてよい。しかし老人の文通は他人との社交的文通は狭い。男女とも 60代 70代では社交の文通は認められるが、女の 80代においては子とか親類が主な文通相手である。

表Ⅺ 文通の状態

性 別		男				女			
	年齢 階層別	60代 (41名)	70代 (54名)	80代 (23名)	計 (118名)	60代 (53名)	70代 (78名)	80代 (31名)	計 (162名)
手紙、はがき がくるか	く る	54%	30%	26%	37%	25%	32%	23%	28%
	たまに くる	34%	42%	61%	44%	43%	49%	39%	45%
	殆んど こない	12%	28%	13%	19%	32%	19%	38%	27%
誰から くるか	息子、 娘から	22 件	13 件	11 件	46 件	15 件	23 件	9 件	47 件
	孫から	2	1	2	5	4	2	4	10
	親類から	10	11	3	24	14	13	10	37
	息子の 嫁から	—	2	—	2	2	4	—	6
	友人から	12	7	3	22	7	15	—	22
	その他 から	7	8	3	18	5	11	1	17

(註) その他には娘の主人も含まれている。

60代の男はまだ現役を退いてから時間的に新しいから友人との文通が多いが80代になると友人も死亡しているから文通もすくない。

息子の嫁は老親とは文通をしている件数が稀である。

つぎに老人が手紙を出すかどうか。老化と共に視力が衰え、手がふるえてくるから字は書きたがらない。便りがきても返事がおくれるとか、出さなことも多いであろうと推察できるが、「出さない」と答えるものが多い。

表Ⅺ 交通の相手方

	年齢 階層別	男				女			
		60代 (41名)	70代 (54名)	80代 (23名)	計 (118名)	60代 (53名)	70代 (78名)	80代 (31名)	計 (162名)
手紙を 出すか	よく出す	15	11	3	29	13	16	4	33
	たまに出す	16	17	7	40	13	20	4	37
	出さない	10	24	12	46	27	34	23	84
誰に出すか	息子、 娘に	12	13	2	27	6	13	5	24
	孫に	—	2	1	3	1	3	1	5
	親類に	14	5	1	20	10	6	2	18
	息子の 嫁に	—	1	—	1	2	2	—	4
	友人に	4	9	1	14	6	8	—	14
	その他	4	8	2	14	9	5	—	14

(註) その他にはテレビクイズなども含まれている。

上記の、「手紙が誰からくるか」と「手紙を誰に出すか」を比較してみるとくる人に返事を出していないから、「出す件数」がすくない。それだけ筆無情になっているとも言える。

(11) 旅行 (表Ⅻ)

老人が小づかいをもらうのは、毎月きまってもらっているものが多いが、それ以外の機会は「旅行に出かける時」が多い。平素小づかいだけでは不足するであろうし、もっと金がいるだろうという息子や娘の思いやりから別に小づかいをもらっている。

ある老人は、旅行に出かけるときくれる小づかいが、たとえ5千円でも、こ

んなとき 息子をもってよかったと思うと語っていたのを聞いたことがある。平素の親子の疎外感が、そんな機会に解けていく温かさを老親は味っているのであろう。また、姑と嫁が同居している三世代同居家族においては、精神的解放のためにも息子が老親にしばらく旅に出ることをすすめている家庭もみられる。

すべての老人が経済、体力、家庭事情に恵まれているとは云えない。ここに調査の対象となった平均的老人のなかにも、一年を通じて、泊りがけの旅に出かけなかった老人が、男女とも32%ある。これらの老人は旅に出るのが嫌いという人もいるし、健康がすぐれない人、バスの排気ガスの臭いに酔うから最近では旅に出かけないという老人もいる。

次表にみる如く男女とも68%は一年を通じて一回以上泊りがけの旅行をしている。その目的地は温泉、ついでお寺参りで、山や海に行く老人は殆んどない。

表Ⅹ 泊りがけ旅行

		男				女			
年 令 階 層 別		60代 (53名)	70代 (72名)	80代 (25名)	計 (150名)	60代 (69名)	70代 (93名)	80代 (33名)	計 (195名)
昨年中に泊りがけ 旅行をしたもの		40	51	11	102	48	65	20	133
		75%	70%	44%	68%	69%	70%	61%	68%
行 先	温 泉	28件	37件	8件	73件	44件	41件	10件	95件
	お 寺 参 り	9	16	10	35	15	33	9	57
	親類・その他	8	9	3	20	19	14	7	40
	山	3	—	1	4	3	4	—	7
	海	4	1	—	5	2	—	1	3
泊りがけの旅行を しなかった		13	21	14	48	21	28	13	62
		25%	30%	56%	32%	29%	30%	39%	(32%)

最近のレジャーブームの影響で老人の泊りがけ旅行は盛んである。老人クラブにおいてもしばしば団体的行事として実施されている。80代の男老人以外はこの層も半数以上が泊りがけ旅行をしている。特に行先きは温泉が多い。老人の旅行は温泉とお寺参りをあわせたものが計画されているために、この結果に

なったのか、老人自身が選んだコースが温泉とお寺(名所)となったのかは分らないが、特に女老人には海が人気が悪い。青年層との大きな相違がみられる。

60代の男女には2泊3日が多く、70代になると1泊2日を好んでいる。しかし女老人は概して長期の旅に出かけている。

全国的にみて老人の泊りがけ旅行は最近の大きなブームである。日本のよさを発見しようという明治人の本能の現われである。

これだけ消費経済が発達すると老人も金をつかうことによって生き甲斐を見出そうとしている。老人は食欲については青年のように大きな欲望はない。着るものも今まで着ているものが一番着なれているから新しい服を買う必要もない。貨幣価値がインフレで低下する。60代70代の老人は昔のように貯金をして金がかたまることに感激をもっていない。いかに楽しく金をつかうかに関心がある。そこにブームとしてみられるのが温泉に泊りがけで旅をすることである。

たとえば、市場で商品を買々と切符をくれる。何千枚が集めると1泊旅行につれていってくれる。老人はこれを楽しみにしている。だから、市場の旅行には老人が多い。

私はかつて市民を対象に泊りがけの一泊旅行を計画したことがある。そのときの参加者は次の通りであった。

30才 — 39才	7%
40才 ~ 49才	18%
50才 ~ 59才	36%
60才 以上	40%

すなわち50才以上の人が76%を占めていることは、この年令層の人がいかに旅行をしたがっているかを示している。

長い人生の大部分を汗と労働で過ごし、ようやく50の坂をこした人には、人生の余暇を楽しむ方法の最良の道は旅に出て、家庭の制約から解放され、未知の風物を見物し、同じ年令の仲間と友達になり、車の中で気がねなく昔の話を語り笑い合いたいのである。

各地へ講演に行くと、どこへ行っても老人クラブの関係者は、クラブの行事として旅行が多すぎると非難している。しかし青年は旅行しすぎると非難している声をきかない。老人が旅行するのは一人では危険だから団体で出かけるので、青年は二人か三人で出かけているのである。

ただ反省を要することは現在の老人クラブが旅行している実態をみると、旅行会社にまかせきりで非教育的、金もうけ主義に利用されているからではあるまいか。

旅行計画のなかには一定数の老人参加者を募ることによって老人クラブの指導者が無料

で参加しているのを非難する人もいる。これも無料で参加するために老人を集めるのではなく、多数の老人が行動するときには世話人が必要だからクラブの役員が付添っているのだと思えば非難することはない。むしろ老人の団体旅行には次の四原則が保証されなければならないと考える。

- (1) 営利を目的とする旅行会社に委せきりでないこと。
- (2) 老人福祉の各分野を内容にもりこんだ旅行計画をたてること。
- (3) 老人の体力、経済力に合致していること。
- (4) 医者が同行していること。(または万一の場合の連絡処置が確保されていること)

外国でも金と暇のある老人達は一年を通じて、大きな観光船にのって世界漫遊をしている。大阪でも老人施設の見学、友情の開発、気分転換、転地保養などの目的で老人の海外旅行が盛んになりつつある。

私達の青年の頃には老人の海外旅行などは想像もしなかったが、今では世界中どこへ行っても必ず日本の老人の団体に出合うほどである。その人達は腰をのばして温泉にひたって青春の汗を流し、世界は狭くなったと語っている。息子や娘も親が海外旅行に出かけるときには必ず小づかいをくれる。老人達は今まで家のため国のためにすべての力を捧げて働いてきたのであるから残り短い生涯のうち一度ぐらいは海外旅行をしたいというのが見はてぬ夢であろう。

将来においては老人が余暇を有意義に活用する方法のひとつとして、ますます旅行がとりあげられるであろう。それは、見聞を広め、友人をつくり、これからの老人の生き方に新しい目標を与える。その意図を広く多くの老人に享受してもらうためには老人専門の旅行団体を斡旋する協会を設立する必要がある。その要件としては、

- (1) 既存の大きな資本をもつ旅行斡旋業者と連絡をすること。
- (2) 老人は一般に低所得であるから安い値段で旅行ができること。
- (3) ホテル、乗物の閑散期を利用し、値は安いサービスは良質であること。
- (4) 三食、おやつ的一切を含めた経費を算出し、チップや余分の金で気をつかう必要のないこと。
- (5) 目的地は主として温泉、老人施設の見学、目的地の老人との交流を含むこと。
- (6) 団員数は40人以内であること。
- (7) 海外の老人旅行協会と連絡をとり、相手国の老人クラブ員と懇談会を開催し、国際親善を深めること。
- (9) 発展したあかつきには老人の団体旅行(国内、国外)についての特別割引制度の設定を政府に運動すること。

ただし、この協会の参加資格の年齢は、50才以上とする。わが国の勤労者は55才が定年制である。しかし、定年前のナラリーマン、労働者に退職金の使いかたについてたづねると、持家のない労働者、サラリーマンは自分の永住できる家をもちたいというのが第一の願望であり、これについて、生涯を働きつづけたから退職金で妻をつれて海外旅行をしたいという希望をもっている。ところが、この希望通りになったという人は2割しかない

ない。8割は希望の計画を実現できなかったという。その理由は適当な中年夫婦向きの海外旅行計画がみあたらず、ついにあきらめたのである。すなわち、今日の海外旅行は余りに多くを欲ばりすぎ、ヤング向きか、さもなければデラックスなブルジョア向きである。堅実な中産労働者・サラリーマン向きの海外旅行プランをしてくれるところがない。

(11) 老人の希望

対象老人のうち何らかの希望を表明したものは次の通りである。

	男				女			
	60代	70代	80代	計	60代	70代	80代	計
希望を表明したもの	71%	78%	76%	75%	73%	74%	82%	75%
現状のままで満足	24%	18%	14%	20%	25%	21%	18%	22%
無 答	5%	4%	10%	5 %	2%	5%	—	3%

老人は現状で満足しているものはすくない。むしろ、どの年齢階層の男女とも7割以上が何らかの希望、期待、改善を意志表示している。

その意志表示は、社会、役所（行政）、医療、こども、老人クラブの運営について卒直にのべられている。夫婦二人とも健在の老人達は外見的には幸福そうに見えるが、子と同居しているものにも、別居しているものにもそれぞれちがった希望がある。

つぎに希望事項を項目別にして示しておく。

A. 社会的希望

希望の分類	主たる年齢階層
すべての老人に老令福祉年金をほしい 年金額の増額を望む	60代 70代に多い
老人ホーム・アパートの建設	子と同居している老人に多い
物価の安定をしてほしい	女老人に多い
若い人と語りたい	夫婦二人きりの70代に多くみられる
職業につきない	60～70の男老人に多い
老人職業相談所をつくってほしい	60代の男老人
定年の延長をしてほしい	70代の男老人
田舎でも老人大学を開催してほしい	60代の女老人
老人大学をもって開催してほしい	60、70の男女とも多い

有料でもよいから老人大学をもっと開催してほしい	70代の男
1万円程度の軽費老人ホームをほしい	60代の女
老人宅には電話を無料でつけてほしい	60代の男女、70代の女
交通公害をなくしてほしい	全年令層に多い

B 役所（行政）に対する希望

老令福祉年金の無差別支給	70代の男
年金を物価にスライドしてほしい	70代の女
老人に判りやすいように役所の文書の形式、文字、説明のしかたをかえてほしい	60代の男に多い
公務員はもっと積極的に公務に取り組んでほしい	70代の男
役人は頭が高いので、もっと老人に親切にしてほしい	70代の男女
市営交通機関の無料化	70代の老人（大阪市外の老人）
70才以上の老人に交通費半額	65才以上に適用希望（女）
軽い運動のできる老人体操場をつくってほしい。	60代の男
太陽のあたる芝生の広場をほしい	60代の男女
老人憩いの場をもっとつくってほしい	60、70の男
老人の税金を安くしてほしい	60代の男
月1回老人学級を開いてほしい	60代の男
老人クラブ、老人大学へ行くときのバス代を無料にしてほしい	70代の女
老人クラブの助成金の増額	70代の男

C. こどもに対する希望

老人を大切にすることをほしい	60、70の男女、80代の女
子供と別居できる住宅（ペア）がほしい	60代の男、80代の女
親に小づかいをせびらないでほしい	60代の男
親を見捨てないでほしい	60代の女
車の中で座席をゆづる習慣をもてほしい	70代の男女

気をつかわずに暮らしたい	60、70代の女に多い
やさしい言葉がほしい	60、70代の女に多い
もっと子や孫がきて話しをしてほしい	60、70、80代すべての老人
もっと孫の世話をさせてほしい	女老人
もう孫のめんどろをみるのがつらい	80代の女老人
孫がうるさいから静かにしてほしい	70、80代の男
家庭内で何か役割がほしい	70、80の男女
子からもっと手紙がほしい	夫婦きりの男
物価にスライドしてお小づかいを増額してほしい	職のない60代の夫婦もの
子や孫の近くで暮らしたい	60代の二人ぐらしの夫婦
子や孫と同居したい	全年令層の男女
孫が早く結婚してほしい	60代の女、80代の男

D. 生活上の希望

個室がほしい	息子夫婦と同居中の、80代の独身男、夫婦ものに多い
娘夫婦と暮らしたい	息子夫婦と同居している80代の独身女、現に未婚の娘と暮らしている60代の男、女
同年令の話す人がほしい（茶のみ友達）	60代の独身の男女、未婚の娘と同居中の70代の独身女
何か役割がほしい	80代の独身男女、60、70代の独身女
自由に時間をつかわせてほしい	息子夫婦と同居中の男女に多い
訪問客がきてほしい	80代の男、女、夫婦きりの老人
もっとお寺参りがしたい	女に多い
旅行がしたい、温泉へ行きたい	70代の男女に多い
生れ故郷へ帰ってみたい	60代の男に多い
釣がしたい	60代の男
自動車の運転してくれる篤志家がほしい	70代の男女
広い家に移りたい	60代の男女

E. 医療に対する希望

待たされずに診察してもらえような老人専門医制度をつくってほしい	70代の男女
60才以上の医療費を無料化	60代の老人
安楽死をしたい	80代の独居の男老人
寝込んだときすぐ看病してくれるホームがほしい	80代の女
死んだときはちゃんと葬式をしてほしい	80代の独居の女

F. 老人クラブの運営に対する希望

単位老人クラブの活動が低調であるから、老連本部は単位クラブの会長役員が積極的に活動するように指導してほしい	60、70代の男女
月1回は必ずクラブの例会を開いてほしい	60代の男女
クラブのなかに排他性が残っているから、もっと開放的になってほしい	60代の男
座談会をたびたび開いてほしい	60代の男
闘病体験発表会を開いてほしい	60代の男
単位クラブの会員増加をはかるよりも内容の充実をはかってほしい	60、70の男女とも
1泊程度の旅行を計画してほしい	60代の男女
上すべりでなく地についた活動をしてほしい	70代の男
役員と一般会員との関係が密であってほしい	60代の男女
男子と女子の性別老人クラブがほしい	70代の女
役員に対する招集命令が多すぎるのでさけてほしい	70代の男女
役員会に出席するときその交通費は出してほしい	70代の老人
老人クラブ会館を建設してほしい	80代の男

社会的希望としては、(1) 老令福祉年金を全老人に、(2) 老人ホーム、老人アパート、(3) 物価安定、(4) 青年との交流、(5) 就職、(6) 老人大学、(7) 老人電話など、おおよそ云われつくしていることで、それだけに実現を急ぐことばかりである。

行政的希望は多岐にわたっている。このうち老人に関係のある役所の文書の

活字の問題は、消費者としての老人の生活権のことである。かつて、ある新聞が老人問題を扱うページの活字を大きくしたことがある。これは役所としても学ぶべきである。

大阪市営のバス、地下鉄が70才以上の全老人に無料になったのが契機として、老人の交通費の割引、またわ無料等の希望が多い。

老人の集会、大学へ行く場合の無料交通制も、学割と同じ次元で考えられよう。今後、当分の間は老人の交通料金の問題が現実の老人運動の中心となるであろう。

老人医療の無料と関連して、老人専門病院なども大きな課題である。同時に70才を65才へと下げていく要望がみられる。

子に対する希望は最も多いが、親と子の温い関係を保持したい心情が現われている。

老人クラブは活動しているクラブもあれば、「ねたきり老人クラブ」といわれるクラブもあるから、老人達は、クラブ活動が地についたものになって真に老人福祉の中心機関になることを念願しているものと受けとれる。

ただし、役員だけが多くの仕事をひきうけさせられているクラブがあるとみえて、役員の一部には、その多忙さと交通費の捻出に苦痛を訴えているのがみられる。

(12) 老人クラブの運営についての問題点

クラブの会員の年令、経験、趣味がちがうので、全員に対する魅力ある運営がむづかしいと老人も認めている。それだけに、よりよく研究し内容を常に向上させる努力が必要である。

クラブによっては会長の後継者に欠乏している。余り多忙すぎるために適任者がいない。会長、副会長、委員長などの役割分担について明かにして指導要領をつくるべき段階にきているのではあるまいかと思う。

老人学級の適当な講師の斡旋をしてほしいという希望が多い。老人にも話のよく分るよい講師をさがしてほしい、ということは老人学級の常に苦心しているところである。

老人クラブへくる老人と老人学級へ集る老人とは同じ質の老人とは限らな

い。老人学級には80才以上の老人は沢山こないがクラブには80才代の老人会員も多くみられる。

老人学級にくる女老人は配偶者のいない人が多く、むしろ一人暮らしの女老人が出席率がよい。しかし、その女老人は一人で出席しないで、女老人の友達と二、三人とさそいあってくるものが多い。

4 結 び

この調査を概観して次の点が明かにされた。

(1) 学生を通じて機縁の方法によって老人に接近することは、生活実態のうち一般には調査が困難であるといわれる小づかいの点について、やや明細に調査し得たこと。

(2) 独り暮らしの老人、ねたきり老人などの特殊の老人には接近することが困難であること。すなわち、学生が選び出す老人は平均的な、そこいらにいる老人であるから、社会から完全に隔離している老人を発見したり、接近することは意識的に計画しない限り困難である。とりわけ、一人暮らしの男老人の調査は女子学生には容易でない。

(3) 男女の小づかい調査を通じて、男老人用たばこの販売の必要性が明かになったこと。また、風呂代の割引券よりも散髪代の割引制度が、より緊急であることが明かになった。

老人達の意見を聞くと、「自分が働いて得たお金が一番気楽に使える」というのが男の老人。ある女の老人は「いくら生活費をたくさんもらってもうれしくない。少しでも小づかいとしてもらったとき本当にうれしい」といっている。

小づかいを医療費に使っている人もいて、恵まれている人との差があまりに大きい。

老人なりにできる仕事を手伝ってもらって、老人に自分も役にたっていることを自覚してもらい生きがいをもたせるべきである。

老人は小づかいがほしくても頼みにくい。ほとんどの老人は気がねしながら小づかいをもらっている。最低限の必需品しか買わないようになり、購買欲をみだしていない。ますます夢も希望も失っていく。生きがいは欲望がみだされ

たときである。老人も色々の欲望のひとつとして物を買うよろこびを味いたい。そのためには老人に小づかいをあげる運動（孝養年金と仮称してよい）を社会全般におこす必要がある。

(4) 老人の旅行の割引制度は政府が考慮すべき課題である。

(5) ライオンズ・クラブなどでは老人と文通する運動をしているが、むしろ老人に対して封筒、切手、はがきを贈る運動をアクティバイとしてとりあげることが賢明といえる。

(6) 夫婦が健在の女老人にあっては、小づかいは主人が配慮している。主人と死別した女老人にあっては、その第一子との年齢差は次の通りである。

女老人	第一子の年齢（平均）
60 ～ 64才	39, 7才
65 ～ 69才	42, 5才

この40才前後の息子とか娘は経済的には、ほぼ定着した年齢層であるが、在学中の孫がいる上に娘は結婚準備のものもいるから出費が多い。老人扶養世帯には税制の上で大きな特典を与えるべきである。

(7) 老親と嫁との関係はむづかしい問題が多いが、これを円滑に結びつけるための努力がなされなければ、文通の上でも断絶の姿であることが判る。孫との関係も決して温かいとはいえない。

追補 本稿は神戸女学院大学社会学科の学生諸君の協力によって、集計・浄書・解明が試みられたものである。いづれも私の演習学生である。その氏名を記して謝意を表したい
四回生・片岡園子・内田和子、三回生・半田陽子、岡田典子、稲田祐子。彼女達の将来に
栄光あれと祈ってやまない。

(附) 老人生活実態調査票

あなたの住居地 _____

1. 男	2. 女
------	------

1. 年 令 1. 60才代 2. 70才代 3. 80才代

2. 配偶者 1. あり 2. 死別 3. 離別 4. 結婚せず

3. 同居者 1. なし 2. 配偶者と二人きり 3. 未婚の息子と 4. 未婚の娘と
5. 息子夫婦と 6. 娘夫婦と 7. 孫 8. その他

4. テレビ 1. あり 2. なし

5. 新聞 1. とっている 2. とっていない 5-1 電話 1. あり 2. なし

6. 小づかい 1. もらっている
イ. 同居の子から (①息子 ②息子の嫁 ③娘)
ロ. 別居の子から (①息子 ②息子の嫁 ③娘)
ハ. 親類から (①兄弟姉妹 ②その他)
2. もらっていない

7. いつもらうか 1. 毎月きまもらっている 2. 正月 3. 盆 4. 9月15
日前後(敬老の日) 5. 息子のボーナス時 6. 息子がきたとき
7. 娘がきたとき 8. 旅行に出かける時 9. 誕生日 10.
お手伝いをしたとき 11. 嫁がきたとき 12. 父の日・母の日
13. 息子や娘の家へ行ったとき 14. その他()

8. 小づかいの使いみちについて最近1ヶ月に実際に使ったもの

1. 衣類 2. 下着 3. タバコ 4. 酒 5. おやつ 6. 本 7. 孫へ
のこづかい 8. 孫へのみやげ 9. 趣味の会費 10. 団体会費 11. 旅行の
費用 12. 芝居 13. 万才・落語 14. 映画 15. お寺参りの交通費、おさい
銭 16. 化粧品 17. くすり 18. アンマ 19. ハガキ・切手 20. 文房具
21. 趣味の材料 22. エサ代(鳥・犬・金魚) 23. 理・美容 24. パチンコ
25. ハキモノ 26. 友人との会食 27. おそなえ(花・供物・線香) 28. 貯金
29. その他

9. 過去一年間にどこへ旅行しましたか

1. 泊りがけで旅行をした(イ. 温泉 ロ. 山 ハ. 海 ニ. お寺参り ホ. 親類
へ. その他)
2. しなかった

10. 若い時の職業は 1. 商売 2. 漁業 3. 会社員 4. 農業 5. 工場
6. 公務員 7. 家事 8. 内職 9. その他

11. 現在の職業は

12. 食 事 (1日に何回食事をするか) 1. 朝・昼・夕の3回
2. 朝 夕 の2回
3. 昼 夕 の2回

13. 心にいだいている希望
今一番してほしいことは何ですか

1. (社会的希望)
2. (こどもに)
3. (役所に)

14. 老人クラブの運営に対して感想又は希望